

## 山岳宗教研究の地理学的諸問題

——岩鼻通明著『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』<sup>1)</sup>を評して——

小 田 匡 保

### I. はじめに

山岳宗教に関する学問的研究の進展は、ここ約20年ばかりの間目ざましいものがある<sup>2)</sup>。『山岳宗教史研究叢書』<sup>3)</sup>をはじめとして、全国各地の事例に関する多くの著書・論文が公刊され、さまざまな分野の研究者からなる山岳修験学会も設立後10年を迎えた<sup>4)</sup>。(歴史)地理学の側からも、数は少ないとはいえ、山岳宗教に対していくつかのアプローチを行なってきた。そのうち長野覺の長年の研究は、『英彦山修験道の歴史地理学的研究』<sup>5)</sup>として先年上梓されたが、このたびは、岩鼻通明の標記の書が刊行されるに至った。

本書は、著者が修士論文執筆以来研究を続けてきている出羽三山信仰について、これまで約10年弱の間に雑誌や単行本に発表してきた論文を、1冊にまとめたものである。全部で17の原論文は、タイトル・内容とも、ほとんどもとの形のまま本書に収録されており、今回新たに書き下ろされた章節は見られない。本書を編むにあたっては、それらの原論文を、序章の他、「第一章 宗教集落」「第二章 即身仏」「第三章 信仰圏」「第四章 道中記」<sup>6)</sup>という四つの章に類別して、一書を構成している。本稿では、章節を追って内容の紹介と評者のコメントを行ない、それをもって表題の山岳宗教研究の地理学的諸問題を論じることにかえたい。

### II. 宗教集落

まず、「序章 出羽三山の山岳信仰」では、山麓の七つの山岳宗教集落と出羽三山信仰の空間的拡がりとは概観される。特に、①各山岳宗教集落間の構造の比較、②各山岳宗教集落の檀那場(勢力圏)の復原に重点がある。本章の記述は、次の第一章の内容と重なる部分が多く、具体的な中身の紹介はそこに譲る。「出羽三山の山岳信仰」という本章のタイトルからすると、蜂子皇子に始まる出羽三山信仰の歴史や信仰・修行の内容についても簡単にスケッチをしてあれば、読者へのサービスになったのではないかと思われる。いくつかの集落の地図・地形図が挿入されているとはいえ、本書全体の「序章」としては、物足りなさが残るところである。

次に、「第一章 宗教集落——聖と俗の境」は、二つの節(原論文)からなるが、中心になるのは第1節「出羽三山をめぐる山岳宗教集落」である。著者はまず、山岳宗教の地理学的構

造として、聖域圏（奥宮の立地する山頂近辺）・準聖域圏（里宮の立地する山岳宗教集落が核となる山麓部）・信仰圏（信徒が居住する周囲の平地）からなる圏構造を想定し、聖域圏と準聖域圏、信仰圏と準聖域圏の機能的関連が考察されねばならないと述べる。そして、対象地域の出羽三山について、聖域圏と準聖域圏（山岳宗教集落）、その境界たる女人結界の概観がなされる。次に、七つの山岳宗教集落を、起源を指標として、近世再編型（手向・岩根沢）・近世成立型（本道寺・大井沢・大網・七五三掛）・未成熟型（肘折）に類型化する。以下、各集落の①景観、②社会構造、③機能、④勢力圏、⑤明治以降の変遷において、近世再編型と近世成立型の間にどのような相違点が見られるかが考察される。①集落景観については、近世再編型は「現在もなお石垣を築き、屋敷林で囲った茅葺屋根の壮大な宿坊が並ぶ」（手向）が、近世成立型は「山岳宗教集落に特徴的な景観には乏しい」と、その差異を述べる。その差異の要因として②社会構造を検討し、各集落とも別当―清僧―妻帯修験―農民という類似した社会構造を有するが、近世再編型は修験集団が門前集落を形成したのに対し、近世成立型は門前農民が近世後期に宿坊先達化することにより山岳宗教集落が成立し、そのことが集落景観の差異となって現われたと記す。③機能については、宿坊・山先達・檀回という山岳宗教集落独自の機能のうち、近世再編型は宿坊機能が十分発達していたのに対し、近世成立型は山先達主体で、宿坊機能がやや未発達であった場合も見られるという。④勢力圏は、近世再編型が、近世成立型より広い勢力圏を有したという。最後に⑤明治以降の変遷に関しては、近世再編型は現在もなお山岳宗教集落の姿をとどめているが、近世成立型は明治以降衰退したと述べる。

本論文は、もと『地理学評論』に掲載されたものであり、本書所収の論考の中でも、構成の整然とした論文である。また、16―17頁に述べられるように、山岳宗教集落の起源による相違に目をつけた点は、卓見と言うべきである。しかし、起源による二分法できれいに一本筋を通したかに見える本論文も、詳細に読み込んでみると、いくつか気になる箇所がある。その第一は、本論中でのまとめ（評者が上に抄出したもの）と、論文末尾「おわりに」の要約内容とが微妙に異なる場合のあることである。たとえば③機能について、本論中では、前述のように、近世再編型と近世成立型の相違を強調しているが、最後の要約では、未成熟型の肘折を除いて、六つの集落がほぼ同様の機能を有すると述べる。④勢力圏でも、本論の方は、近世再編型と近世成立型で勢力圏の広さが違うことを締めくくりとするが、論末では近世再編型が国郡郷村単位の檀那場主体であったのに対し、近世成立型は各坊の檀那場が錯綜していたと、檀那場制度の違いを持ってきている（この問題点については後で触れる）。また①景観については、本論中では、上に引用したように、漠然とした目に見える姿の違いが述べられるが、最後の要約では、近世再編型は妻帯修験と農民の居住が分離していたのに対し、近世成立型は両者が混住していたとする。このような本論と「おわりに」の間の論点の不統一は、一見明快な著者の論旨を不明瞭なものにしてしまっている。なお、①景観について付言すると、「おわりに」にある修験と農民の居住分離云々は、本論では目に見える姿の違いの理由として景観の節であげられ

ているものである。社会階層によるセグリゲーション自体は、景観レベルの問題ではないと評者は思うのであるが、それが景観の節でとりあげられ、最後に景観の差異の要約として述べられるのは、社会集団の空間的配置も景観に含まれると著者が考えているためであろうか。

評者が気になる点の第二は、個々の事実と著者のまとめとの間に、齟齬の見られることである。たとえば、④勢力圏について、近世再編型は国郡郷村単位の檀那場、近世成立型は各坊の檀那場が錯綜と最後にまとめるが、国郡郷村単位は羽黒(手向)が中世から持っていた霞<sup>7)</sup>についてのみ当てはまることであり、同じ羽黒でも近世に開拓した福島・関東の檀那場、同じく近世再編型の岩根沢の檀那場は、近世成立型の本道寺の檀那場同様、各坊間の檀那場は錯綜している。それぞれの檀那場制度が中世的体系・近世的体系であることは言えても、それを近世再編型・近世成立型の特徴とすることには無理があるのではなかろうか<sup>8)</sup>。また、同じく④勢力圏に関して、近世再編型は近世成立型より広い勢力圏を有したと述べるが、図2に示された本道寺(近世成立型)と岩根沢(近世再編型)の檀那場分布を見ると、近世成立型の本道寺の方が、関東北部の檀那場の多い分だけ、近世再編型の岩根沢より勢力圏が若干広い印象を受ける。もっとも、他の集落も含めて両類型の平均をとれば、近世再編型の方が勢力圏が広いのであろうが、この図は著者の主張とは逆のことを示す結果になっている。⑤明治以降の変遷についても、近世再編型と近世成立型の違いを著者は指摘するが、本道寺(近世成立型)と岩根沢(近世再編型)は同じような景観・機能・集落構造の変化をしている。これも、他の集落とあわせて考えれば、両類型の違いが出てくるのであろうが、それにしても、本道寺と岩根沢を一括してその変遷の特徴を述べる(33頁)のは不用意ではなかろうか。このように個々の事実を再検討してみると、同じ近世再編型の手向と岩根沢よりも、著者が異なる類型に分類した本道寺と岩根沢の方が、意外に似ているのではないかと思われてくる。④と⑤の類似は上に指摘したとおりであるし、②社会構造においても、ともに集落内に農民を含む点で、百姓のいない手向よりも互いに似ている。そもそも岩根沢の中世史料が見つからないということにも鑑みれば、出羽三山の山岳宗教集落の中で、手向だけが特殊なもののように評者には思われる。著者の行った七集落の類型化が妥当なものであるのかどうか、あらためて検討し直す必要が出てこよう。

以上の他にも、[1]冒頭に述べられた山岳宗教の圏構造論が、あとの集落の比較にあまり意味を持っていないこと、[2]著者が前稿<sup>9)</sup>で示した「山岳宗教集落」の定義を、「近世再編型」の集落を念頭においていると自己批判しながら、それに代わる新たな定義を提示していないこと、[3]「近世再編型」とは称しても、中世に成立していた集落が、近世初期に具体的にどのように再編されたのか、その中身がはっきりしないこと、[4]⑤明治以降の変遷において、景観・社会構造・機能の変化は考察されているが、勢力圏の変動にはほとんど触れられていないこと、[5]①景観において、近世の目に見える景観自体は検討されていないこと、[6]図表が効果的に論旨に活用されていないことなどの問題点が目につく。しかしながら、本論文のより根本的な問題は、近世再編型と近世成立型の間の違いが何によって生じるかが、はっきり説

明されていないという点である。単純に考えるならば、中世以前に起源を持つ集落と近世に成立した集落の諸側面が違うというのであるから、その相違の理由は、集落の成立時期に求められるはずである。しかし、成立時期の違いが、集落の景観・社会構造・機能・勢力圏、そして明治以降の変遷にどのように影響するかというそのメカニズムについてはほとんど言及がなく、大部分は類型間の現象の差異を指摘するにとどまっている。著者は、社会構造（+機能）→景観という影響関係を想定しているが、これも、社会構造（+機能）の変化が社会集団の空間的配置にどのように影響を与え、いかにして目に見える景観の差異をもたらすかについては曖昧なままである。「なぜ違うか？」は、今後に残された大きな課題であろう。ただ、その問題に取り組む際、あまりに起源の違いを強調することは、「成立時期決定論」に陥るおそれがある。たとえば、近世に成立した集落であっても、交通条件の変化により今後大きく発展する所があるかもしれない。山岳宗教集落の類型化は、まだまだ検討すべき余地が残されている。

なお、冒頭にある山岳宗教の圏構造論は、戸隠を扱った1981年の著者の論文<sup>10)</sup>に既に見えるものである。その論文の中で、著者は、石飛一吉<sup>11)</sup>（聖域・準聖域）と宮田登<sup>12)</sup>（第一次～第三次信仰圏）の所説を総合したものとしているが、類似の圏構造の発想自体は、1972年に有賀密夫<sup>13)</sup>によって示されている。有賀は、出羽三山を事例にして、「三山（山上）」を「聖域」、「山麓信仰集落」を「準聖域」、その外延部を「檀家（信仰）圏」ととらえ、それぞれ「Center zone」、「Middle zone」、「Outer zone」とも呼んでいる。この有賀論文は戸隠論文には見えないが、本論文には引用されている。しかし、多くの「宗教集落に関するモノグラフ」の一例として挙がっているのみで、肝心の有賀の圏構造論には触れられていない。同じ出羽三山をフィールドとして同様の圏構造を見いだしているからには、やはり一言これに言及すべきではなかったかと思う。

さて第2節「羽黒山花祭り」では、前半に出羽三山の概要が述べられるが、特に湯殿山について、中世末に大綱両寺の修験者が発見した可能性を示唆しているのが目をひく。また、「出羽三山」の呼称は、昭和初期に学術用語として使われ始めたもので、近世には「三山」「奥三山」という呼称が一般的だったという指摘は興味深い。「出羽三山」という基本的な地名の問題は、このようなところでさりげなく言及するのではなく、やはり本書の冒頭でも、もっと詳しく触れてほしかったところである。ともかく、羽黒山では羽黒修験の伝統を継承した各種の年中行事が行なわれるのに対し、羽黒以外の宗教集落には著名な行事は存続していないということで、後半では、現在毎年7月15日に行なわれる羽黒山の花祭りについて、その歴史的歩みや花梵天の意味などが述べられている。

### Ⅲ. 即身仏

「第二章 即身仏——ホトケになったヒト」は、三つの原論文からなる。即身仏というテー

マは地理学から遠いということもあるためか、章としての頁数は本書の中で最も短く、いちばんこじんまりした章になっている。第1節第一項「湯殿山即身仏信仰再考」では、湯殿山即身仏の研究史をふりかえった後、大網の大日坊と七五三掛の注連寺のみで盛んに即身仏が造られた理由として、両寺が朱印地を持たず、檀那場も狭い範囲しか有していなかったがゆえに、湯殿山から下ってくる参詣者を引きつけるセールスポイントを必要としたこと、明治以降湯殿山別当寺としての機能を失ったために、それに代わる崇拜対象を設ける必要があったことを推測する。次いで、庄内地方の湯殿山行人碑を分析し、ほとんどの石碑が行人の生前に建立されていること、すなわちぬけがらのミイラではなく、宗教活動を実践する生身の行人が民衆に信仰されたことを指摘する。また、鉄門海の石碑は庄内一円に広く分布しているが、他の行人の石碑はそれぞれ特定の狭い地域に集中していると述べ（図1は、行人ごとに記号を違えてプロットしたほうが分かりやすかった）、行人が御師的役割を果たしていたのではないかとする。最後に、大日坊や注連寺の寺院側の立場、祀る側の立場としては、即身仏は信徒集めの道具であったと極言し、祀る者の思想と祀られる者の思想は区別しなければならないと記す。なお、本書収録の段階で、内藤正敏からの批判に対する反論が、追記として付け加えられている。

本論文が提示したいくつかの視点は、従来の即身仏研究には見られなかったものであり、読んでいて刺激的である。若干のコメントをつけるならば、著者は祀る者と祀られる者の区別を言う。このレトリックは一見分かりやすいが、その中身には曖昧さが残る。祀る者の思想とは、著者の強調する寺院側の戦略のことであるが、祀られる者の思想とは何を指すのであろうか。字義どおりにとれば、行人の宗教思想ということになるだろうが、それが何なのかははっきりしない。さらに、二項対立的なこのレトリックは、行人や即身仏を信仰する民衆の存在を不明瞭にしてしまうのではなからうか。著者は即身仏信仰全体について論じるつもりはなさそうであるが、著者の異議申し立て的な論点を評者なりに発展させるならば、寺院側の戦略、行人の思想、民衆の信仰という三つの点を総合することにより、いわゆる湯殿山の即身仏（入定ミイラ）信仰の発生と展開についてまとめていかねばならないであろう。

第1節第二項「信夫山の即身仏と九戸城の鉄門海碑」は、即身仏関連の資料を二点紹介した小文である。ひとつは、岩手県二戸市九戸城跡にある湯殿山碑で、鉄門海の影響力がこの地にまで及んでいること、文化9年の碑は初期のものであることを述べる。もうひとつは、福島市の信夫山に存在したという元禄年間の即身仏の事例で、梅宮茂『信夫山』に依っている。

第2節「大網地すべりと大日坊の移転」は、著者自身も認めるように、論題や冒頭に記した目的からはかなりそれた内容になっている。具体的には、大網の地すべり（地形）と民話・伝説との関連、地すべりによる大日坊移転（昭和12年）以前の旧境内地景観を描いた図、旧境内地にあった宝篋印塔の「真如海」（即身仏）銘への疑問、異人殺しとしての即身仏の解釈などについて述べている。

#### IV. 信仰圏

「第三章 信仰圏——山と里の交流」は五つの原論文からなるが、中心となるのは、分量的にも内容的にも第1節の「出羽三山信仰圏の地理学的考察」である。本論文ではまず、「宗教がおりなす地域構造」の解明が、宗教地理学の重要な課題であることが述べられ、教団組織の有する階層的な地域構造に加えて、信仰形態の地域差に着目した信仰圏研究が必要であるとされる。次に、宮田登<sup>14)</sup>に始まる従来の山岳宗教の信仰圏研究が批判的にレビューされ、宮田の第一次～第三次にわたる同心円の信仰圏の「仮説」<sup>15)</sup>は、圏域設定の指標に問題があること、宮田や彼以降の研究でもこの仮説は実証されていないことが指摘される。そして、本稿では宮田の仮説に基づき、より精緻な圏域設定の指標を追求し信仰圏モデルを再構築すると記す。この後、講・末社・石碑の分布を検討することにより、出羽三山信仰が東日本一帯に広く分布していることが確認される。出羽三山からの距離では説明できない分布の濃淡については、①仏教宗派（特に浄土真宗・日蓮宗）との関連、②他の山岳信仰との競合関係、③各藩・県の宗教政策が、濃淡を規定する要因として想定される。さらに、文献資料を中心に収集した出羽三山信仰の諸事例が、各都県ごとに検討される。そして、同心円の分布を示す指標として、①参詣者の年齢、②共同体的結合か同信的結合か、③出羽三山から勧請した分霊の分布が挙げられる。これらの指標から、第一次～第三次にわたる出羽三山の信仰圏が設定される。すなわち、第一次信仰圏は、青少年の出羽三山登拝が見られ共同体的結合の強い山形県下（半径50km以内）、第二次信仰圏は、成年層の参詣が中心で代参講形式の圏域（半径50～150km）、第三次信仰圏は、老年層の参詣が主で同行仲間型の講が見られる圏域（半径150～350km）である。また、出羽三山から勧請した分霊は、第二次信仰圏と第三次信仰圏の境界領域に多く存在するとする。さらに、各圏域内でもいくつかの地域類型が設定されている。最後に、山岳を中心とする同心円の信仰圏とともに、信仰を受容する村落の側でも、村落を中心とした山岳に対する同心円的な空間認識の存在することが述べられる。

『史林』に掲載された本論文は、従来の信仰圏研究の問題点を指摘したうえで、それを克服する実証的な出羽三山信仰圏の同心円の構造を提示しており、本書の中では、先の第一章第1節の「出羽三山をめぐる山岳宗教集落」論文と並んで高く評価されるべきものである。信仰圏を論じようとする時には、出羽三山に関するものであろうとなかろうと、避けては通れない論文であることは間違いない<sup>16)</sup>。

ところで、信仰形態のようなものについて、均質なデータを広い範囲にわたりくまなく収集するのは、なかなか困難なことである。著者は『日本民俗地図』や各地の民俗誌類を渉猟して、出羽三山関係の信仰事例を107例集めているが、かなりの時間と労力を要したものである。そのことを承知したうえで述べるならば、圏構造を導き出す中で同心円の分布を示すと

された三つの指標自体の事例数には、やはり物足りなさを感じてしまう。たとえば、参詣者の年齢は、23例（うち青少年9例，成年8例，老年6例）が挙げられている。これは、図のうえで青少年の参詣が近くに、老年層の参詣が遠方に、成年層はその中間に分布していることが示されているので、三つの指標の中ではいちばん説得力を持っている。しかし、山形県・福島県・千葉県以外のデータが少なく（多くて2例）、まったくデータの無いところが対象15都県中8都県もあるため（これはもちろん信仰が希薄であることにもよるのだが）、同心円構造という想定（先入観）がなければ、山形県・福島県・千葉県それぞれに参詣者の年齢層に違いがあるという解釈で片付けられてしまうかもしれない。

③出羽三山から勧請した分霊の分布についても、事例3（青森県）、事例8（岩手県）、事例39・46？（福島県）、事例79（新潟県<sup>17)</sup>、事例82・84（栃木県）とやはりデータ数は限られる。ただ、これを図化すれば著者の意図がより伝わったであろう。なお、「出羽三山から勧請した分霊の分布」とは著者の表現であるが、これでは図3にもある「出羽三山末社の分布」と混同される。「時間的、資金的に出羽三山参詣が困難な場合に、勧請した近在の分霊に参詣する」（125頁）所というのが著者の言わんとするところである。それでは図3にもある多くの出羽三山末社には参詣しないのかという、屁理屈のような疑問が次にわきおこってくる。おそらく、末社創建の時代と民俗誌類の時代との違いも関係してくるのであるが、著者はこの疑問には触れていない。

②の宗教集団（講）が共同体的結合か同信的結合かについては、データ数の多少を云々する以前に、何をもちって共同体的・同信的とみなすのか、どの事例がどれに該当するのかが明示されず<sup>18)</sup>、したがってそれぞれの分布状況も図示されていないため、説得力を欠いたものになっている。もっとも、著者の側に立てば、採録された信仰事例だけでは共同体的結合か同信的結合か判然とせず、解釈に困るものも少なくないであろうし、また共同体的・同信的の両極の間にあるさまざまな中間形態の扱いにも苦慮するであろう。なお著者は、代参講形式の信仰を共同体的結合と同信的結合の中間形態とみなしているが、参詣の形式と結合様式とを同一次元の指標にしてよいものかどうか気にかかる。

以上のように、107の信仰事例から出羽三山信仰圏の同心円構造を見いだす手順には、問題がない訳ではないのだが、これをくつがえすデータが手元がない以上、同心円的な構造があることはやはり認めねばならないであろう。収集データのさらなる整理と加工・図化を行なえば、読者への説得力も増したのではないかと思われる。欲を言えば、信仰内容自体に何らかの地域差を見つけ出せば、それこそ「信仰圏」の名前にふさわしい圏構造になったのではなかろうか<sup>19)</sup>。

ところで、三重の同心円構造が存在するとして、さらに考察しなければならないのは、なぜそのような構造（各圏域の順序）になるのかということである。著者は、参詣経費や体力などについて若干触れてはいるが、詳しくは説明されていない。体力の面は、あまり強調しすぎる

と、高齢者が最も遠方から訪れるのが奇異に感じられることにもなる。もしこれを、各圏域の相互関係ではなく、霊山からの距離で説明しようとするならば、各円の大きさも次なる検討課題として浮かび上がってくる。著者は、おそらく参詣者の年齢やその他の指標の分布状況に基づいてであろうが、それぞれの円について、半径50km, 150km, 350km<sup>20)</sup>という明確な数字を提示している。これらの数字に意味があるかどうかは、他の霊山の信仰圏と比較をする場合に問題になってくるはずである。著者は、自らの提示した「信仰圏モデル」(87頁)の他の霊山への適用可能性については何も述べていないが、池上広正<sup>21)</sup>の指摘をまっまでもなく各霊山の信仰圏全体の規模は大小さまざまであり、各圏域の大きさについても、著者の示した基準値がそのまま当てはまるかどうかまだ検討の余地があると考えられる<sup>22)</sup>。

さらに、「はじめに」にあるような他の宗教の分布を考慮に入れる時、山岳宗教の信仰圏が特殊であることにも気がつく。つまり、日本国内だけに限っても、神道や仏教諸宗派の分布の場合、山岳宗教ほどの強力なただひとつの中心地があるという訳ではないのである。その理由を考えてみると、ひとつには山岳宗教が霊山という特定の土地に密着した宗教であることが考えられる。しかしながら、もうひとつ看過してはならないのは、山岳宗教の信仰圏が、「参詣者の年齢」という指標に明確に見られるように、その中心地たる霊山に登拝に来る信者の範域を暗黙裡に想定している点である<sup>23)</sup>。その意味において、山岳宗教の信仰圏は、社寺参詣者の範域と同じ次元のものであり、英語で言えばcatchment basin<sup>24)</sup>(またはcatchment area, 本来は集水域の意味)ということになる<sup>25)</sup>。このような特殊性を持つ山岳宗教の信仰圏研究を他宗教の研究とどう接合していくのか、山岳宗教に信仰の分布域としての「信仰圏」と登拝者の範域である「登拝圏」「巡礼圏<sup>26)</sup>」の二重構造を考えていくべきなのか、残されている課題は大きい。

その他、細かいことを四点挙げておく。第一に用語の問題であるが、著者が冒頭で繰り返して強調する「(宗教がおりなす)地域構造」は、地域を構成する諸要素の関係を言う訳ではないのだから、「空間構造」でよいような気がする。また、「信仰圏研究」「信仰圏の設定」などと著者が「信仰圏」の語を使う場合、ほとんど「圏構造を持つ信仰圏」「信仰圏の空間構造」の意味で使われている。「信仰圏」という言葉自体は、本来信仰の拡がりの全体的範域しか意味しないであろうから、その内部構造を言う時は、より厳密な表現を用いるべきであろう。

第二に、レトリックの問題で、著者は教団組織の階層的な地域構造を「中心からの視点」によるものとし、それに対して信仰形態の地域差に着目した信仰圏研究を「周辺からの視点」、あるいは「信仰を受容した地域の側から(の)逆照射」と呼ぶ。この対比は一見明快であるが、教団組織と信仰形態では見る対象の次元が違うのではないかという気がする。周辺から見た教団組織の研究、中心から見た信仰圏研究というのはありえないのであろうか。出羽三山を中心とした同心円構造が想定されるということ自体、「中心からの視点」とも思われるし、「中心からの視点」「周辺からの視点」が何を意味するのか、「周辺からの視点」とは地域差を言うた



めのものなのか、それとも「おわりに」で示唆される村落を中心とした同心円的空間認識のようなものなのか、つきつめて考えると次第に分からなくなってくる。

第三に、著者は前稿<sup>27)</sup>で、宮田の信仰圏論を踏襲する形で第一次～第三次信仰圏を論じているが、それについては研究史のサーベイの中でも触れられていない。おそらく、論文執筆上の方略のひとつとして言及しなかったのであろうが、著者の宮田批判(84—85頁の他, 103—104頁)は、同時に自己批判にもなっていることを指摘しておきたい。

第四に、図3「出羽三山末社の分布」の月山神社・湯殿山神社の分布状況が、本文中の説明と合致しない。山岳宗教集落の勢力圏と見比べてみると、どうも図の凡例の月山と湯殿山が入れ替わっているように思われる。

その他、信仰圏研究には時代的变化など本論で扱われていない論点もある<sup>28)</sup>が、ここでは触れずにおきたい。

さて、第2節第一項の「羽黒修験と遠野」は、遠野盆地の羽黒修験について概観したもので、自身の現地調査を再現する形で筆が進み、最後に文献史料に基づいた記述がある。ちょっとした覚書という感じである。以下の三つの項は小文が続く。第二項「千葉県の出羽三山行屋史料」は、千葉県文書館に所蔵されている市原市の出羽三山行屋関係史料を紹介した報文である。著者が概略を述べた一点の史料は、明治24年の出羽三山参詣道中記であり、第四章に入れてもよかったのではないと思われる。第三項「空間の民俗学と文化地理学」は、坂本源一『常陸国南部の大日信仰』をもとに書かれたもので、坂本に対しては、茨城県南の出羽三山碑の建碑を大網大日坊の影響とは考えられないと批判し、あわせて「空間の民俗学」に機能地域的なマクロな空間の理解が欠けていると指摘する。もっとも、短い評文ゆえに、坂本批判と「空間の民俗学」の問題がどのように結びつくのか、評者にははっきり理解しかねるのであるが。第四項「空間の民俗学と文化地理学・続」は、森毅『修験道霞職の史的研究』に対するコメントで、森の引用した史料から注連寺・大日坊関係の読み取りができることを述べている。

## V. 道中記

「第四章 道中記——旅のなかの信仰」は、六つの原論文から構成されている。第1節第一項の「道中記にみる近世の出羽三山登拝」では、まず出羽三山信仰を支える人々として、①宗教集落の人々(御師・山先達)、②在地修験(里先達)、③各地からの参詣者の三つのグループをあげ、近年の研究動向の中で、③の視点からのアプローチが遅れをとっていることを指摘する。そして、その視点からの検討において、民俗資料に基づくだけでは神仏分離以前の信仰の姿が掌握できないとし、近世の信徒側の史料として道中記に注目することを述べる。その出羽三山道中記を使って、次に二つの問題が議論されている。ひとつは、近世の出羽三山登拝の行程についてであり、三山すべてに参詣するとは限らないとする桜井邦夫説<sup>29)</sup>を批判して、三

山すべてに登拝するのが通例であったこと、その順路は羽黒山から月山を経て湯殿山へ参詣するのが一般的であったことが示されている。もうひとつは芭蕉の出羽三山登拝についてで、これが湯殿山からまた羽黒山へ引き返すという例外的な行程をとっていること（その理由についても、二、三の案が出されている）、芭蕉が強力におんぶしたという最近の説には疑問があることを述べている。

本項の冒頭で著者の行なった研究動向の展望は、ひとつの整理方法を示している。しかし次に、著者が道中記に着目する理由として、民俗資料<sup>30)</sup>では近世の状況が把握できないことをあげるのは、安易な理由づけのような気がする。確かに民俗資料の持つ問題点は指摘のとおりであるが、しかし民俗資料と道中記とでは、時代差は別として、資料の次元・内容が違うのではなかろうか。たとえば、現在の出羽三山参詣について聞き取りをする場合でも、参詣ルート・宿泊地くらいならばともかく、道中の金銭出納額まで口頭で聞き知るは無理であろう。現代版の「道中記」がやはり資料として必要になるはずである。道中記の資料としての意義を強調するならば、民俗資料・道中記それぞれにどのような性格のデータが得られるのかを整理しておく必要がある。著者の解明した出羽三山参詣のルートについては、多くの道中記史料に裏づけられた貴重な成果であるが、批判的になっている桜井説も、それほど批判するにはあたらないのではなかろうか。桜井の文章をそのまま引用すれば、彼は「出羽三山と一口に言っても必ずしも全ての山に参詣するのではない」<sup>31)</sup>と述べている。著者の調査からは、40例中すべての山に登拝しているのが33例という結果が出ており<sup>32)</sup>、桜井の示した7例中3例<sup>33)</sup>に比べれば全山に登っている割合は大きい。桜井の言説がとりたてて明らかな間違いであるとは言えないであろう。おそらく桜井は、「出羽三山参詣」という言葉どおり常に三山すべてに登ると考えるのは安易すぎると注意を喚起しているのであり、著者の示したデータは、桜井の指摘を否定するというより、むしろそれを補強していると見ていいと評者は感じる。著者の第二の論点である芭蕉の出羽三山登拝については、2年後の論文（次の第二項）で再論されている。若干ニュアンスも変わっているので、そこで触れることにしたいが、一点だけ気づいたことをあげれば、本論文では、強力に背負われたことへの疑問のみが念頭にあって、荷持ちとしての強力が考慮されていないように思われる。役銭200文を、強力に支払った費用と断言できないとするのは、強力に1貫目130文で荷物を頼む史料もある（244頁）だけに、言いすぎのような気がする。

第二項「芭蕉と羽黒修験」の全体的な趣旨は、芭蕉の「奥の細道」の旅を信仰の旅として再評価しようとするものである。具体的に記述されているのは、「奥の細道」の旅の目的地が出羽三山ではなかったかということ、芭蕉が寛永寺から出羽三山の現地視察を任じられた可能性があること、出羽三山登拝ルートが先述のように異例であった理由として、①両造法論（天台・真言両派の争い）の影響で真言宗の大綱・七五三掛を避けた、②羽黒修験の秋峰を意識したルートであるということが考えられること、芭蕉が月山登拝時に強力に背負われたとの説は疑

わしいことなどである。

本論文では、芭蕉の旅が信仰の旅であるという著者の主張が、明快に論証されているとは言いがたいように思われる。著者は最初に、伝統的な社寺参詣の旅の特徴として、①精進潔斎期間・サカムカエ行事がある、②循環的行程が存在する（往路と復路が一致しない）ことをあげ、「奥の細道」の旅もこの二点が存在するから信仰の旅と理解できるとしているが、やや強引な印象を受ける。特に②については、芭蕉の旅が循環的行程であるからといって、必ずしもそれが信仰の旅であるとは言いきれないであろう（循環的行程と信仰の旅の問題については、第2節の論文「道中記にみる出羽三山参詣の旅」で中心テーマとして論じられており、そこで詳しく言及したい）。次の出羽三山が目的地であったという主張も、憶測の部分が大きく何とも言えないように感じる。さらに、出羽三山の現地視察の使命を帯びていたとしても、それを信仰の旅と呼んでいいものか疑問を覚える。そして、登拝ルート・強力の問題は、芭蕉が寛永寺・羽黒修験と関係があるという前提のもとに論が進められており、信仰の旅であることの論証にはなっていない。本論文は、むしろ、芭蕉の旅を先験的に信仰の旅として考えた時に、どのような点が見えてくるかを述べたものであり、いくつかの新たな見方を提示したことは評価できるが、それぞれの妥当性についてはさらに検討を要するであろう。なお、登拝ルート・強力について旧稿（先の第一項）との違いを見ておくと、登拝ルートが異例である理由のひとつに、旧稿では、芭蕉の旅が出羽三山参詣のみを目的とせず諸国遊行的性格を持っていたことをあげているが、これははっきり取り消されている。先述②の羽黒修験との関係は、本論文で新しくうちだされたものである。強力については、旧稿では芭蕉の登拝に強力は関係がないという論調が垣間見られるが、本論文では強力は山先達であろうと述べている（その当否については評者は判断しかねる）。このような旧稿からの見解の変更について、著者は何も触れていないが、やはり一言注記しておくべきではなかろうか。

第三項「六十里越街道をゆく人々」は、山形と鶴岡を、月山・朝日山地を越えて結ぶ六十里越街道の地誌といった趣である。本論文では、その由来・歴史、周辺の宗教集落、峠をはさんだ二つの街道集落（志津・田麦俣）、ここを歩いた旅人の記録（ひとつは高山彦九郎の『北行日記』）、明治以降の変化などについて述べられている。

第2節第一項の「道中記にみる出羽三山参詣の旅」では、まず従来の社寺参詣研究が社会経済史的考察中心で、江戸時代の社寺参詣を信仰の旅として把握する姿勢が欠落していると批判する。そして、本論文の検討課題として、①近世の社寺参詣を物見遊山の旅と断言できるか、②それは自己の意志による自由な旅であったか、という二点を掲げる（②は新城常三の所説の検討である）。次に著者は、資料となる出羽三山参詣道中記を検討し、参詣季節と行程に関して、南東北・関東からの参詣と北東北からの参詣には大きな差異が存在することを指摘し、本論文では北東北から伊勢西国参詣の途中に出羽三山に参詣するものを対象外とすると述べる。その後、17点の参詣道中記について、その行程が復原・図化され、行程図をもとに、出羽三山

参詣の旅が原則的に循環的行程を有している（往路と復路が異なる）と記す。さらに、他の二、三の例を援用して、著者は、近世の社寺参詣全般が循環的行程を有していたとの仮説を提起する。当初の課題①については、近世の社寺参詣が信仰の旅であることが強く示唆され、②は、村落共同体を代表して参詣するという点で自由な旅とは言いがたいと述べる。

『歴史地理学』に掲載された本論文は、各地からの出羽三山参詣ルートに関しては、史料に基づいてある程度の傾向が示されているものの、論旨の論理展開に難がある。上述の要約の中であげたように、著者は冒頭で二つの検討課題を設定するが、②については、論文末尾に一応の解答が出されてはいるものの、著者が作業を行なった参詣行程の図化から導き出される結論とは思われず、「聖なる円環の旅」として規制されるという著者の説明も牽強付会の感を禁じ得ない。①に関しては、著者の主張が論理的に立証されるには至っていない。著者の論法は、「A社寺参詣の旅は循環的行程を有する。B循環的行程は信仰の旅の本質である。Cしたがって、社寺参詣の旅は信仰の旅である」というものである。ここで、Aについては著者の図示したとおりであるが、Bはいかがなものであろうか。評者には、信仰の旅が循環的行程をとらなければならないとする以外にも、信仰の旅には行程の制約がないという考え方もできるように思われるし、循環的行程になる理由を、信仰の旅は常に未知の聖なる空間へ向かうことが要求されるからと述べるのは、目的論的説明の観がある。さらに、信仰の旅が循環的行程をとるとしても、それ以外の旅（たとえば、著者の批判の矢面に立っている物見遊山の旅）が循環的行程になることはないのであろうか。物見遊山の行程も循環的であるならば、Cの結論とともに、社寺参詣の旅が物見遊山の旅であることも認めなければならないであろう。①の課題に関してより根本的な問題を指摘すれば、社寺参詣の旅は信仰の旅であるというCの結論を導き出すのに、AとBを持ち出すのは有効であろうかという疑問である。確かに、参詣行程という旅の空間的側面に着目するのは、いかにも地理学的な切口であり、後学の者としても学ばねばならないところである。しかし、旅の宗教的要素を明示するためには、表面的な旅の経路よりも、もっと参詣者の旅の内実まで踏み込んで検討する必要があるだろう。さらに付け加えるならば、著者は従来の研究が社寺参詣をおもに物見遊山の旅とみなしていると批判する。だが、社寺参詣が本来信仰の旅の性格を持つことは誰の目にも明白であり、その信仰の旅が実は物見遊山の旅でもあったというところに既往の研究の論点があったのではなかろうか。評者がここで言うまでもなく、近世の社寺参詣は信仰の側面も物見遊山の側面も併せ持っているものであり、どちらが強いのかという①の問題提起をするよりも、信仰の旅の側面にはどのようなことがあるか（たとえば毎日宿で読経するというようなこと）を明らかにしていくほうが生産的であろう。なお、論文中の図のタイトルと中身が合わないものがある（たとえば、南関東と題された図4に北関東の事例が記されている）のは気になった。

次の第二項「北東北からの出羽三山参詣」では、今の第一項論文で対象外とした北東北から伊勢西国参詣の途中に出羽三山に参詣するものについて、考察を展開している。著者は、21点

の道中記史料の大部分が、三山のうち羽黒山のみに参加していることを指摘し、その理由を参詣季節と旅の行程から検討する。開山期との関連など二、三の着想も示されているが、結局は、結論を提示することなく筆をおいている。羽黒山にしか登らないものがほとんどという本論文の指摘は、先の第1節「道中記にみる近世の出羽三山登拝」論文における桜井説批判と矛盾するように見えるが、先の論考では、このタイプの出羽三山参詣は、旅の性格が違うとして考察対象から除外されている。

最後の第3節「出羽三山参詣道中記史料」は、著者の確認した100点以上の史料の所在目録と一部史料の抄録、それに著者による史料の解説である。第四章第1・2節の論考は、このリストにある史料を活用してなされたものである。東日本の各都県から、これだけ多くの量の道中記を博搜してきたことには感服する（ただし、所在確認のみで、道中記の本文を見ていないものも含まれる）。ここで残念なのは、抄録されている六つの史料が、すべて市史類などの刊本に翻刻されたものの転載（正確には転々載）であることである。稀覯書からの転載ならばともかくとして、著者には道中記原本からの翻刻を試みてほしかった。なお「史料解説」の部分は、解説というよりも著者の覚書という感じが強く、本当に解説らしい史料の概要説明や史料調査の手順は、第四章第1・2節の中に見られる（160頁，190—193頁）。特に第2節第一項の「道中記にみる出羽三山参詣の旅」論文では、道中記の県別分布や作成年代について、まとまった紹介がある。

## VI. 本書全体に関して

以上、個々の原論文ごとに逐一内容の紹介と評者のコメントを行ってきたが、最後に本書全体に関わる事柄について述べておきたい。

まず本書の構成の問題である。冒頭にも記しておいたように、本書は、著者がこれまで発表してきた論文が、ほぼそのままの形で収録されている。このような本づくりの方法は、本書に限ったことではなく、他にもしばしば見られるものである。この種の「論文集」の利点は、さまざまな雑誌類に掲載された論文を捜しまわる手間が省け、一書で関係論文を一覧できることである。本書の場合も、それは当てはまる。著者の論文の掲載誌には、山形県内の民俗学会誌などサーキュレーションが限られているものが多く、地元関係者以外は入手が難しかった。また、著者の研究のエッセンスが込められた論文は地理学関係の学術誌に載せられ、山岳信仰に関心を持つ他学の研究者の目に触れにくかった。その結果、時に著者の優れた研究成果が見過ごされることにもなったのであるが、著者の論考が本書にまとめられることによって、他地域・他分野の研究者も著者の研究に容易にアクセスすることができるようになった。これは非常に喜ばしいことと言える。

しかしながら、そのような利点を認めただうえで、評者は本書にただの「論文集」<sup>34)</sup> 以上のも

のを期待してしまう。そもそも一冊の本をつくるということは、やはりそこにひとつのまとまった世界をつくるということである。といっても、この種の本を書き下ろしでつくりあげるのは簡単ではないから、多くの場合既存の論文をもとにまとめることになるのだが、それぞれが独立したものとして（しかもある程度の時間的ズレをもって）書きあげられた個々の論文は、そのままの形では一書にうまく収まらないのが普通である。本全体のまとまりをつけようとするれば、何らかの加筆修正や、新たな章節の書き下ろしが当然求められる。その補筆作業の中に、読者は著者の研究の進展と全体像とを見ることができる。本書はこの作業をほとんど行なわなかったがために、上述の指摘の如く章節間で重複や見解の相違が見られることに加え、さらに現時点での著者の研究の全体像について詳しく知ることができなかったのは残念である。大々的な書き直しや書き下ろしでなくとも、せめて各論文についての著者自身の解題でも付して、著者が過去の自分の論文を現在どうとらえているのかが分かれば、本書の価値は増したであろう。

第二に、著者の研究史批判とも言うべきものについてである。著者は、従来の研究史と具体的データに基づいて立論をする一方で、旧来の説に対する批判を、時に辛辣な言辞で述べる。出羽三山信仰研究のみならず、山岳宗教研究全般に対しても問題を提起し論争を期待する著者の意気込みは評価されてよいだろう。ただ、既に各論で評したように、著者の批判が必ずしも的を射ていない場合もあるように評者には思われる。また、批判の相手がセレクトティブではないかという気がしないでもない。著者は、「史料に即した理論的<sup>35)</sup>な反論の出ることを期待して」(78頁) いるが、その反論の際には、裏付けとなるデータを提示するとともに、著者の批判の論理構成自身も再検討してみる必要があるように評者は感じる。なお、著者の使用している資料に二次資料が多いことには批判も予想される。しかし、ミクロな地域を研究対象とするならともかく、ある程度の広い範囲を視野に収めようとするれば、既往の研究成果に依存することも、効率上やむをえないであろう。

以上、本書に対する辛口の評を述べてきたが、広い視野から見た本書の持つ意義についても述べておかねばならない。本書は、上述のような問題があるにせよ、今後発展させるべき多くの研究テーマを提示している。そのことによって、山岳宗教研究における地理学の存在意義を示すことにもなっている。山岳宗教に関係する学問分野は多岐にわたるが、これまで中心となってきたのは宗教学・歴史学・民俗学であった。そのような中で、信仰圏・宗教集落など地理学的観点から進められた著者の研究は、それらが本書にまとめられることによって、長野の書とともに、山岳宗教研究全体にさらにインパクトを与えるに違いない。また本書は、地理学における(山岳)宗教研究の存在をもアピールしている。宗教というテーマは、地理学ではマイナーである。著者以前にも宗教に関する地理学的研究はあったものの、散発的なものであり、活動の盛んな他の地理学分野と肩を並べられるような状態ではなかった。著者や長野らの研究成果によって、最近ようやく(山岳)宗教研究の存在も、地理学界の中で少しは認知されてきたのではないかと思われるが、本書の出版はまたそのひとつの契機となるだろう。

本書の章立てが示すように、宗教集落・即身仏・信仰圏・道中記の四本柱で進められてきた著者の出羽三山信仰研究は、そのフィールドを、立山・戸隠山など出羽三山以外の霊山や社寺にも広げている<sup>36)</sup>。また研究資料としても、本書ではほとんど扱われなかった社寺参詣マンガのような絵画史料や絵図に着目をしている。本書の評を主旨とする本稿では、もはやそれらに言及する余裕はない。本書をもとに、今後また新たな研究が展開することを期待して、筆をおきたい。

#### [付記1]

本稿の骨子は、1992年9月の京都民俗学談話会例会（於京都大学楽友会館）にて発表した。その際、八木透氏をはじめとして出席者の方々からは有益なコメントを戴き、本稿の補筆の参考にさせていただいた。記して厚くお礼申し上げたい。

#### [付記2]

本稿脱稿後、戸隠の信仰圏に関する著者の論文<sup>37)</sup>が発表された。そのまとめによると、戸隠から50km以内の第一次信仰圏では水神としての性格が強く、50～150kmの第二次信仰圏では水神の性格とともに作神・農耕神としての性格が強い。さらに150～350kmの第三次信仰圏では、作神の性格がより濃厚に見られるという。ただ、出羽三山で見られた年齢階梯制との対応は不明瞭であるとする。この論文は、著者が出羽三山研究において提示した「信仰圏モデル」を、同じ大きさ（半径）の三重同心円構造という点では踏襲しているが、各圏域の特徴は別物であり、信仰内容の違いによって区別されている。参詣者の年齢にはこれといった傾向がなく、第二次信仰圏の特徴とされた代参講も第一次～第三次のすべての信仰圏に見られる。また、50、150、350kmという各圏域の半径は、信仰内容を指標にしてあらためて決められたとは思われず、戸隠の同心円の信仰圏は、出羽三山の「信仰圏モデル」の形だけを残して、中身をすり替えたもののような気がする。圏域設定の指標、各圏域の大きさなど、同心円の信仰圏はまだ研究の余地がある。

#### 注

- 1) 岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』、名著出版、1992。
- 2) 1970年に、修験道関係の著作が相次いで出版されている。五来重『山の宗教——修験道』、淡交社、1970、宮家準『修験道儀礼の研究』、春秋社、1970（1985年に増補版刊行）、村山修一『山伏の歴史』、塙書房、1970。
- 3) 『山岳宗教史研究叢書』全18巻、名著出版、1975～1984。
- 4) 学会誌『山岳修験』は1985年に創刊され、1992年秋現在第10号（1992年10月発行）まで刊行されている。
- 5) 長野覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』、名著出版、1987。
- 6) 「宗教集落」「即身仏」「信仰圏」という第一章から第三章の三つの章題が、いずれも研究対象を表わしているのに対して、第四章のタイトル「道中記」は研究資料である。他の章に準ずるならば、第四章は、著者の論じている内容からして、「信仰の旅」もしくは「登拝・参詣」という章題になるべきところである。それが「道中記」という研究資料の名前で表現されているのは、他の章に比べて、著者が道中記という一次資料により深く関与しているためであろう。
- 7) 東北地方を中心とする檀那場のこと。これについては、27頁よりも147頁の説明の方が分かりやすい。
- 8) これに関連して、28頁の「(羽黒の)『会津・奥州』および関東檀那場は、……岩根沢および本道寺の檀那場と同様、……『近世成立型』の勢力圏として特徴的である」との一文は、理解に苦しむ。

- 9) 岩鼻通明「観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌」, 人文地理33—5, 1981, 75頁。本書には未収録。
- 10) 前掲注9) 75頁, 79—80頁。
- 11) 石飛一吉「屋久島における山岳信仰圏の研究」, 鹿児島地理学会紀要22—2, 1976, 44—52頁。ちなみに, 石飛の言う「信仰圏」は, 一般的な理解の「信仰圏」とは異なる彼独特のものである。
- 12) 宮田登「岩木山信仰——その信仰圏をめぐって」(和歌森太郎編『津軽の民俗』, 吉川弘文館, 1970), 277—295頁。
- 13) 有賀密夫「出羽三山を中心とする山麓信仰集落について」, 地域研究13—1, 1972, 40頁。
- 14) 前掲注12)。
- 15) 宮田は, 最初から, 第一次～第三次信仰圏が一般に存在するものとして後の話を進めているが, 著者はこれを「仮説」と呼んでいる。
- 16) 佐々木高明「信仰圏」(日本地誌研究所編『地理学辞典 改訂版』, 二宮書店, 1989) 318—319頁には, この文献が挙がっておらず, 山岳宗教の信仰圏研究にも触れられていないが, 甚だ残念である。
- 17) 著者が本文中で名前を出す乙宝寺参り(事例71)は, 本尊が出羽三山から勧請されたかどうか本論文のみでははっきりしないので除いた。
- 18) 前述の③にもそのきらいはある。③の事例番号は評者が捜し出したものである。
- 19) ただし著者は, 宮田が第一次信仰圏の特徴として挙げた①水流分源の山, ②生産暦機能の山, ③祖霊の山, ④山の神・田の神のこもる山という四種の信仰を, 山岳宗教に一般的に見られる信仰にすぎないとして, 圏域設定の指標からしりぞけている。
- 20) ただし図4では, 50km, 150kmと並んで, 半径300kmの円が描かれている。なぜ半径350kmの円を描かなかったのかよく分からないが, 結論的な半径50km, 150km, 350kmの同心円を図5上に描いたほうが, 読者にアピールしたであろう。
- 21) 池上広正「東北地方に於ける山信仰——特にその信仰圏について」, 宗教研究137, 1953, 4—6頁。
- 22) ちなみに, 牧雅子・西海賢二の描いた筑波山の同心円信仰圏の図によれば, 最も大きい牧の第三次信仰圏でさえも, 空間的には著者の信仰圏モデルの第一次信仰圏内に収まってしまう。もっとも各圏域の意味している内容が, 著者のものとはまったく異なるのではあるが。  
 牧雅子「筑波山信仰の信仰圏」(佐々木宏幹他編『現代宗教2(特集・山岳宗教)』, 春秋社, 1980), 141—160頁。彼女の図(146—147頁)によれば, 第一次信仰圏の外縁は半径約5km, 第二次信仰圏は約20km, 第三次信仰圏は約40kmの所に設定されている。  
 西海賢二『筑波山と山岳信仰——講集団の成立と展開』, 崙書房, 1981。彼の図(20頁)によれば, 第一次信仰圏の外縁は半径約7km, 第二次信仰圏の外縁は約14kmに設定されている。
- 23) 著者は「信仰圏」の語を定義していないが, 普通に考えれば信仰の空間的拡がりの範囲を指すものであろう。著者は, 講・末社・石碑の分布状況から出羽三山信仰の分布域を確認しているが, これこそ本来の信仰圏の範囲になろう(ただし, 著者はこれを信仰圏とは記しておらず, 圏構造を持つものを「信仰圏」と呼んでいるようである)。
- 24) Nolan, M. L. and Nolan, S., *Christian Pilgrimage in Modern Western Europe*, The University of North Carolina Press, 1989, p. 22などの用語による。そこでは, 「巡礼地がすべてまたは大部分の宗教志向の来訪者を引き寄せるところの地理的範囲」と説明されている。彼女は, また「range of drawing power」とも表現している。
- 25) 評者はかつて, 著者の英文要旨の表現に倣い, 信仰圏を「sphere of religion」と表記したことがあるが, アメリカ人のネイティブ・スピーカーにはすぐに理解してもらえなかった。
- 26) 田中啓爾『地理学の本質と原理』, 古今書院, 1949, 243—254頁に, 「巡礼圏」の語が見られるが, 西国・四国などの巡礼札所の分布域といった意味あいでも使われており, 本稿の意図するものとは別



物である。ちなみに、同書には「各社寺を中心とする信仰圏」(244頁)の概念も登場しているが、早い時代のものであろう。

- 27) 前掲注9) 79—80頁。
- 28) 古田悦造「近世羽黒派修験の信仰圏について」, 日本地理学会予稿集16, 1979, 270—271頁, 小田匡保「小豆島における写し霊場の成立」, 人文地理36—4, 1984, 61—62頁を参照のこと。なお, 第一次～第三次信仰圏の言葉を使い始めた宮田は, 第一次から第三次への「信仰圏の拡大」を念頭においていたのではないかと考えられる。宮田登「山岳信仰と講集団」, 日本民俗学会報21, 1961, 5—14頁。
- 29) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」, 駒沢史学34, 1986, 144—181頁。
- 30) 「民俗資料」の意味するものを著者は明示していないが, 前後の文章から判断して, 『日本民俗地図』や各地の民俗誌類にある聞き取り調査(石碑調査も含まれるか?)の結果資料を主に指していると思われる。
- 31) 前掲注29) 152頁。
- 32) 著者は, 桜井が湯殿山のみが欠けるとした慶応元年(1865)の福島県の道中日記(E1)を, 三山すべてに参詣しているものとして扱っている。
- 33) 著者は, 桜井の用いた7点の史料のうち, 「羽黒山または湯殿山が欠けるものが各一点」(160頁)と紹介するが, 桜井の説明によれば, 羽黒山が欠けるものは二つある。
- 34) 出羽三山関係の論文を四つのテーマに類別してあるから, 正確にはただのランダムな寄せ集めではない。
- 35) 著者は, 重箱の隅をつつくような批判を嫌って「理論的」という表現を使ったのであろうが, 評者は, 「理論的」反論以前に「論理的」反論をする必要があると思う。
- 36) 巻末の論文初出年を見ると, 出羽三山に関する主要な論文は, 比較的早い時期に発表されていることが分かる。
- 37) 岩鼻通明「戸隠信仰の地域的展開」, 山岳修験10, 1992, 31—40頁。

# Geographical Problems in the Study of Mountain Religion:

A Review of

*A Historical Geography of Mt. Dewa-sanzan Belief*

by Michiaki Iwahana

Masayasu ODA

This paper attempts to point out some geographical problems in the study of Japanese mountain religion through an critical review of *A Historical Geography of Mt. Dewa-sanzan Belief* by Michiaki Iwahana published in 1992.

The Dewa-sanzan Mountains are situated in Yamagata Prefecture in north-eastern Japan. They have been well-known as one of main sacred mountains and have drawn many devotees from east Japan. Iwahana, the author of the book, deals with the Mountains' belief from four viewpoints: religious settlement, mummy worship, religious area, and pilgrimage. Main points of issue are as follows:

1. The author pays attention to differences by origin among religious settlements looking after pilgrims to the mountains. He classifies the seven religious settlements around the Dewa-sanzan Mountains into two types: one was formed in the Edo period (the 17th to mid-19th century), and the other was before the beginning of the Edo period. Many differences are shown between these two types as to their landscape, social structure, function, influential area, and changes after the end of the Edo period. First question from the reviewer is that one settlement classified within the pre-Edo period type, according to the materials the author presents, rather resembles ones belonging to the other type, so that his classification needs to be reexamined. Second and more essential problem is that he describes differences between two types but does not explain the mechanism in which the differences have appeared. It is worth discussion why they differ from each other by the formation period. However, we must be careful not to fall into "formation-period determinism," because the development of settlements also depends on such regional conditions as transportation.

2. There are some mummy deities only in the two religious settlements at the western foot of the Dewa-sanzan Mountains. The author emphasizes the strategy of temples which seem to have needed something new to attract pilgrims because of their little economic basis and loss of interests in the mountains after the Meiji Restoration (ca. 1870). His indication should be developed in connection with the thought of ascetics and the worship of the people.

3. The author criticizes past studies on religious area for incomplete procedures and points out that the hypothesis of concentric zone structure has not been demonstrated. He collects cases of the Dewa-sanzan belief from folkloric literature and finds out elements that are distributed in the form of concentric zones. They are age of pilgrims, way of connection in the religious group, and so on. By these indices Iwahana establishes the first to third religious zones represented in three concentric circles. That is, the first religious zone (within a radius of 50 kilometers) is marked by pilgrimage of younger generation forced by the community, and the second religious zone (a radius of 50 to 150 kilometers) is characterized by adult pilgrimage. In the third religious zone (a radius of 150 to 350 kilometers) old pious people go on a group pilgrimage. One problem during the argument process is that, in the case of age of pilgrims, the number of the instances is too small and they are clustered on a few areas. As to the other indices the author does not identify the cases exemplifying the respective zones' character, much less locates them on the map. Second and more essential problem is that it is not explained why the religious area has such concentric zone structure, namely the order and the radius of each zone. Applicability of Iwahana's "religious-area model" is not clear. When we compare mountain religion with other religions, we find out the peculiarity of the religious area of mountain religion. That is to say, it has only one conspicuous central place, because its religious area implicitly assumes the catchment basin of respective sacred mountains. Joining the study of religious area between mountain religion and other religions is a theme to be further explored.

4. The author criticizes past pilgrim studies for lacking perspectives on its religious aspects. He collects travel diaries to the Dewa-sanzan Mountains in the Edo period, and locates the pilgrim routes in 17 cases on the map. As a result he points out that the pilgrim route in the Edo period was a circuit, and concludes that the pilgrimage in the Edo period is a religious travel. In the reviewer's opinion there is a leap in his logic to the conclusion. He says the circular route is an essence of the religious travel, but it is doubtful. In order to insist religious aspects of the pilgrimage, its various phenomena besides the routes should be examined.

The author makes this book by compiling his 17 past papers related to the title without revision. As a result there are some discrepancies in his opinion between sections. It is a pity that his present and overall view is not clear.

On the whole this book presents many problems in the study of mountain religion, although his criticism is sometimes beside the point. In any case it shows the significance of geographical approach in the study of mountain religion and values of religious concerns in geography.